島崎藤村全集 5

島崎藤村全集　5

島崎藤村全集　5

昭和三十一年五月十日　発行
定価　一八〇円

著者　島崎藤村

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八
古田晁

印刷者　東京都三鷹市上連雀九九〇
今井直一

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
電話　東京（29）七六五一（代表）
振替　東京一六五七六八

印刷　株式会社三省堂
製本　和田製本工業株式会社

春

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

一

「岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで来たまえ。その日を期して東西から富士のもとに会することとしよう。君の都合もあろうと思うから為替で旅費を送る。」こういう意味の手紙が東京にいる友だちから行ったので、いよいよ岸本も西のほうの旅から帰って来るという知らせがあった。東京の友だちはそこで新橋を発つ。一行三人、青木、市川、菅——岡見兄弟は都合があって加わらなかった。

連中が東海道を下ったころは明治二十六年の夏である。たいぶその日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。

会合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建ての離れがあって富士はよく見えた。三人が占領したのはその二階の一室で、離れのほうにはほかに泊まり客もない様子。時々顔を出す四十かっこうのかみさんよりほかにほしいままな雑談を妨げるものがなかった。結句気楽な宿である。よごれた畳の上に寝ころびながら、三人は岸本の来るのを待っていた。

「もう見えそうなものだなあ。」

と言って青木は身を起した。

青木はやせぎすなほうで、新しい紺飛白の単衣を着て、兵児帯を無造作に巻き付けている。くつろげたふところからは白い夏シャツがあらわれていて、そのボタンのはずれたところに、すこし胸のはだが見える。この男の物を見る目つき、迫った眉、青ざめた頬、それから雄々しい傲慢な額なぞの表情は、傷つけ破らざればやまずとでもいったような、非常に過敏な神経質を示していた。懺悔するような口元にはなんとなく人の心を引きつけるところがあった。それを見ると、世の中の惑溺や汚れをなめ知った人のくちびるを思いいださせる。そこから力のこもった声が出る。

「岸本君も困るでしょうね。」と青木は市川のほうを

見て、「これからさきどうするつもりなんでしょう。」
「さあ。」市川も身を起した。
「そういつまでも岡見君の世話になってはいられないだろうし。」
「実はぼくもそれを心配しているんです。」と言って市川は青木の顔をながめた。
市川は高等学校の制服を着けている。うすねずみ色の夏の上着に包まれたきゃしゃな体格、短く黒い髪、青じろく広い額、鷹のくちばしを見るような高いりっぱな鼻——すべて彼の様子にあらわれたところは、東京の下町で堅気な家庭に育った人であるということを思わせる。彼の細い柔らかな目は、おとなのような思慮を表わしていて、若輩ながらに世上の人をにらむといったようなふうがあった。三人の中で、この男が一番年下である。
青木は粗末な煙草入れを取り出して、鉈豆煙管でスパスパやって、
「しかしおもしろい変化さねえ、岸本君が家を飛び出すなぞは。」こう言い出した。
「どうしてあの男が旅に出る時の勢いはすさまじいものでしたよ。」と市川は友達が出奔の当時を思い浮かべるような目つきをした。「パンは天にあり、てなことを言って——」
「はゝゝゝゝ。」
青木はあざけるような声を出して笑った。
こういう話の間、菅は横になったまま身動きもせずにいる。
「菅君はうらやましいねえ。」と青木は考え深い目つきをしながら、「実に菅君は平和だ。」
「さっきから寝つづけじゃないか。」と市川も笑う。
「ぼくは眠っていやしないよ。」と菅も笑い出した。
「こうして、君らの話を聞いているんサ。」

二

菅は寝返りを打つようにぐるりと身を返して、やがてうつぶしのまま頬杖を突いた。彼は寝ながら謹聴と

いう態度を執った。心のいいこと無類というこの青年の目には哲学者のようなおちつきがある。彼はまた年に似合わず毛深いほうで、あごの辺なぞは奇麗にそり立てているが、濃く厚いひげのあとは青々と人の目についた。連中で彼を好かないものはない。彼は年寄りにも子供にも好かれそうな性質である。

その時、市川は嘆息して、「実はぼくも、もうすこしで岸本君のあとを追うところだったのです。」

「君もそういう気になったかねえ。」と青木は思いやりのある語気で言った。

「なにしろぼくのところなぞは事情の多い家で、姉と養子の折合いはよくないし。」と市川は言いかけて、しばらく相手の顔をながめて、

「姉はまた、なんにも知らないものですから、いちずにぼくをたよりにしてるんです。ぼくが旅にでも出てしまおうものなら、あとはどうなるか知れない。今一足――というところで、ぼくは考えました。」

「そこで考えるのがあたりまえだね。」

「岸本君の行き方はそうじゃない。あの男が考える時分には、もう一足踏み出してしまってる。」

「そんなら見たまえ。」と青木は力を入れた。「岸本君のように破って出ようとしたところで――つまりどうなる。そこが悲しいところさネ。束縛というしつこいやつはどこまでも人間についてまわるよ。」

市川は胸を突き出して、「とにかく、きわどい芸をやったものだ。」

「はゝゝゝゝ。」と青木はひどい声で笑い出した。旅の友だちのために泣く心と、局促とした自分の身をあざける心と、この二つが今彼の胸にはいっしょになっている。

「さすがの岸本君も弱って来るだろうなあ。」と市川が言った。「行くところまで行ってみなければ承知しないという男だ。」

「あの男は昔からああいうふうでした。」と菅も寝ながらあごを突き出す。

青木は癖のように頭を振って、「ぼくに言わせると、

あまりに先生は熱しすぎる。熱するのはおもしろいが、馬車馬ではツマらん。」

「馬車馬！」市川は横手を打った。

「ああ堅くなってしまっても困りものだ。」と青木は笑いながら、二人の相手の顔を見比べて、「どうでしょう、君、ああいう男には少し酒でも飲ませてみたら。はゝゝゝゝ。」

「酒を飲ませるか――こいつはおもしろかろう。」と菅は笑いながら身を起す。

「菅君がこういうことを言い出すからねえ。」と市川もいっしょになって笑った。

ふと物の音がした。

市川はそれを聞きつけて、耳を澄ましていたが、人が来たのでもなんでもないとわかった時は、菅と顔を見合わせて笑った。待っても、待っても、岸本は見えなかった。

「君、君、」と青木は待ちあぐんで、「こうしていたってもしようがない。すこしそこいらをぶらついて来ようじゃないか。」

やがて三人は連れ立って二階の梯子を降りて行った。

三十分ばかりたって、この宿へ来てわらじを脱いだ一人の青年がある。久留米飛白のひとえに角帯を巻き付け、夏帽子、脚袢、尻端折りという風体で、肩へ掛けるようにしたふろしき包み二つ、ほかには大和の檜木笠も携えて来た――この男が岸本だ。彼は二階へ案内され、そこで脚袢のひもを解いた。さあ、友だちは容易に帰って来ない。青木や市川やそれから菅の置いて行ったもの、洋傘だの、手ぬぐいだの、そのほか手荷物のたぐいが室内に散らかっている。急に熱い涙が岸本の頬を伝って流れて来た。彼は自分の汗臭いふろしき包みに顔を押しあてて、激しく泣いた。

三

「あれほど苦労して来ながら、こういう光沢でいるんだからねえ。」と市川は意味ありげなことを言って、

久しく会わなかった岸本の顔をながめた。散歩に出かけた三人は宿へ引き返して旅の友だちを取りまいたのである。

あかく泣きはれた岸本の頬はまず三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、からだの割合に幅の広い肩なぞは、寒い山国の生まれということを示している。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じやすいと同時にぐずぐずした——こういうあわれむべき性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。彼と、菅とは同窓の友であった。

「旅費まで送ってもらってすまなかったね。」と岸本はかしこまったようにすわりなおした。彼はありがたいという面持で、なつかしい友だちの前に手を突いた。

菅は気の毒そうに、「あれは青木君から、君のほうへ送ったんです。」

「恐ろしく物堅いねえ。」と青木は笑った。「まあそんなことはどうでもいいさ。」

長い旅の話が始まった。三人の友だちは熱心に岸本の顔をみまもった。家を出、職業を捨て、友だちと離れて、半年の余も諸国を流浪して来たということは、岸本が精神の内部をよく説き明かしていた。それほど彼は動揺していた。彼が漂泊したところは東海道から西のほうで、熱田から便船で四日市へ渡る、亀山というところに一晩泊まる、それから伊賀近江の国境を歩いたが、その間にはいろいろな寂しい悲しい旅の思いを経験した。黒ずんだ琵琶湖の水をながめた。西京の古い都も見た。須磨の海岸にはしばらく逗留していたこともあった。彼はまた、伊豫行きの汽船に乗った。それは旧友の足立をたずねるためであった。そればかりではない、彼は大和のほうへも一月余りの旅をして、吉野の宿で岡見の兄にめぐりあった。

琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の目にあった。彼が西京から湖水のほとりへ引き返して、それからこの吉原へやって来るまで、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りていた。そのころは自炊だ。しまいにはしち

りんをあおぐのもめんどうくさくなって、三度三度煮豆で飯を食ったこともあった。亭主というは大工が本職で、かたわら寺へ納める花を作ったし、かみさんは内職に螢の籠を張る、むすこは大津の下駄屋へ奉公している、こんな人たちと岸本はしばらく同じ屋根の下に暮らした。そのうちに、蛙が鳴き出す、螢が飛んで来る、蚊に責められるのがつらいから彼は自分で紙帳を張って、すそへは古銭を飯粒ではりつけて、渋うちわでバタバタ風を入れてはそのなかへはいって寝た。

「ソラ、また始まった。」と家の人たちが聞きつけてクスクス笑ったものであった。かみさんはよく時の惣菜などを皿に盛って持って来てくれた。ある晩、亭主が大津のほうへ行った留守に、紙帳の外で「岸本さん、岸本さん」と呼ぶ声がする。岸本は黙って震えていたが、それから急に恐ろしくなって、ちょうど友だちから為替が来たのをさいわい、逃げるようにして江州の宿を発った。もっともこんな事は三人の前では話さなかった。

「あわれむべき巡礼だ。」

と青木は心に繰り返していた。

四

まもなく飲み食いする物がそこへ持ち運ばれた。久しぶりの会合というので、互に酒をくみかわした。楽しい、ほしいままな、人の心を浮き浮きさせるような飲みものは、結ぼれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

「菅君はいけないんですか。」と青木は杯を差して、

「すこしやりたまえな。」

「いえ、だめです。」と菅は手持ちぶさたに見えた。「ぼくは奈良漬に酔うほうの口なんですから。」

「まったく菅君はやりません。」と岸本は弁護するように言った。「そうそう、菅君といっしょに高輪の蕎麦屋で飲んだことがあった。あの時は君、ホラ、二人で五勺あつらえたっけね。」

「五勺あつらえるやつがあるもんか。」と青木は笑う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

岸本は菅と顔を見合わせた。菅は笑って舌を出してみせた。

「市川君はいけそうだ。」と青木は銚子を持ち添えて勧めて、「まあ、もう少しやりたまえ。」

「ぼくは青くなるほうです。」と市川は両手で頬を押さえてみる。

「青くなるのは強いんだそうだ。」と菅が物を頬張りながら言った。

「いったい、市川君はいくつでしたっけ。」と青木は何か思い出したように、「ぼくはまだ君の年をよく知らない。」

「ぼくですか。」と市川は笑って、「ぼくは二十一でさ——たしか岸本君は明治五年でしたね、ぼくは六年だ。」

「そうかなあ、みんなまだ若いんだなあ。」と言って、青木は菅のほうを見て、「菅君はむしろぼくのほうに近いでしょう——どうもそのひげの様子では。」

「ええ。」と菅は笑いながら、青々としたあごの辺をなでた。

その時市川は眼鏡越しに岸本の様子をながめていたが、妙に意味ありげなほほえみを浮かべた。自分の膳の上にあった杯をグッと一息に干して、それを差しながら、

「岸本君のために西京の健康を祝す。」

と乙なことを言い出した。急に岸本は赤くなった。

「西京という人のうわさがよく出たっけなあ。」と菅もほほえみながら。

「この男もなかなか罪の深いほうさ。」と市川は岸本のほうを見て、軽く相手のひざをたたくような手つきをした。「君、君、東京のほうで心配してる人がありますよ。」

青木も菅も笑わずにはいられなかったのである。

やがて共同の事業の話が出た。彼らの中には早くから社会に出て働いているものもあり、まだ親がかりで学校へかよっているものもある。境遇はまちまちである。岡見兄弟の家というは日本橋大伝馬町の鰹節問屋

であったから、いっさいの費用はそのほうで持ち出して、雑誌を出すことにしたのがその年の正月——ちょうど、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であった。

酔いが回るにしたがって余計に遠慮がなくなって来る。岸本が旅で書いた稿の中にある笑うべき文句のまねなぞが始まる。菅や市川は盛んにそれをやり出した。「馬車馬」という言葉もいくたびか繰り返された。目の両わきへ手をあてがって、鼻息ばかり荒く駆け出して行く獣の光景なぞを見せつけられるので、岸本はもうショゲ返ってしまった。青木はまた、聞いてもらうつもりで、自分の書きかけの草稿をふろしき包みの中から取り出して読んだ。

それは元祿の大家が明治の代に生きかえったころであった。外国の文学も次第に海を越してはいって来た。

イギリスの詩歌——ことにシェクスピアの戯曲は青年の間に読まれた。よく連中の話にも上る。

その日も、青木は「ハムレット」の悲劇を持ち出した。彼は横浜で西洋の俳優が演じたのを見たという。その舞台面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身ぶり手まねまでやり出した。さあ、ほかの友だちは目をみはる。中には口をモガモガさせて物を食いながら彼のほうを見ているものもある。力のこもった青木の声はあの名高い独語を暗誦するに適していた。彼は西洋人の寝言を借用して、実は自分の胸の底にわだかまる言いがたい思いを伝えようとするらしかった。その時、胸をおどらせたは岸本で、青木の言うことが一々思いあたる。岸本はこの友だちに導かれて、今まで自分が考えていたよりは、さらに深く狂皇子の悲壮な精神を感得したような気もした。青木に言わせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。この最も悲しい夢を見たという言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白をつかっているのか、自分を白状しているのか、わからなかった。彼の目——狂熱の光を帯びた彼の目は燃え輝いた。彼は冷たくなっ

た酒を飲んで、すすりなくように笑った。
菅は足を投げ出しながらそれを見ている。

五

ハムレットを見せた青木はさらにオフェリヤを見せると言い出した。彼は酔って立ち上がった。花束のかわりに白いハンケチを振って、清しい声で歌い出したのはあの可憐な娘の歌である。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
And his heals a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers;
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右訳歌

「いづれを君が恋人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり、
かしらの方の苔を見よ、
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は

高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるままに葬りぬ。」

（「おもかげ」の訳より）

友だち仲間でこの歌を愛誦しないものはない。彼らはこの歌を口ずさむごとに、若々しい思想が胸の底にわき上がるのをおぼえた。市川も岸本も酒の香に酔って、青木の歌に調子を合わせた。

「菅君。」

こう言いながら、市川はおちついた友だちの手を握った。彼は菅の顔をながめて、楽しそうにからだをゆすって、やがて笑い出した。

「清さんは伝馬町ですか。」と岸本は思い出したように、市川のほうへ向いて尋ねた。

岡見兄弟を区別するために、弟のほうは清之助の名を呼ぶことにしている。

市川はうなずいて見せた。

「岡見君は――」

「大磯のほうでしょう、しばらくぼくも会いませんが。」と市川は答えた。

その時青木は、三人の若い友だちがむつまじそうに語り合うありさまをながめながら、残りの酒をやっていた。連中で細君のあるものは青木一人である。彼は早く結婚した。二つになる女の子の親でありながら、ようやく二十六にしかならない。もっとも、年齢順から言うと、岡見の兄が一番年長者で、この人は三十近かった。例の心やすだてから、岡見翁などと戯れに呼んだものであったが、その翁ですらまだ独身者でいるくらいで、ほかの連中ときてはいずれも世帯持ちの苦労なぞを知らない時代にある。青木は今さらのように、若い友だちと、妻子のある自分と、その生涯の相違を引き比べてみた。

「オヤ。」と市川が言い出した。「岸本君は煙草をのみだしたね。」

岸本は近ごろのむことを覚えたというふうで、洋銀の鉛豆煙管でスパスパやって見せた。

「だいぶ手つきがいいぜ。」と菅は笑って見ている。

「これでも君、よほど上手になったんだよ。」と岸本は煙を吹いて見せて、「旅に出るといろいろなことを覚えるね。どうも手つきがおかしいなんて、西京では笑われた。」

「ヨウヨウ。」

市川は手を打って笑った。

その晩はこういう話で持ち切った。彼らは七月の夜の明けるのも知らないくらいであった。

六

翌々日の朝、四人は箱根へ向けて吉原の宿を発った。めいめいおもしろい風俗をしていたが、なかにも青木は尻端折りで、毛脛を出して、紺足袋草鞋ばき、それに岸本が大和から持って来たという檜木笠を借りてかぶった。道々盛んな笑い声が四人の間に起った。沼津から三島までは乗合馬車がある。戯れに青木は鞭を執って馬を駆りながら出かけた。その辺は岸本が旅のはじめに歩いて通った道である。蠅の群れは来てみんなのきものに取り着いた。

三島から山へかかって、午後の三時過ぎには一同元箱根の宿にあった。一夏箱根に夏期学校のあったことがある。その時分、菅と岸本とはこの宿に泊まっていたので、ばあさんとも心やすい。その日もすぐに湖水に面した座敷を二間あけて貸してくれた。粗末ながらもどてらを出して、風呂を炊いて、夜具ふとんいっさいで、一晩三十銭ずつの約束とは、諸色の安いころである。

山の上は涼しかった。木の葉のまじった山家らしい風呂を浴びたあと、旅慣れない市川は痛そうな顔つきをして、水ぶくれのした足のまめを苦にしている。

菅は見て取って、「君、煙草のやにをぬってつけるといいよ。」

「ナニ、そんなことをしないでも、切って水を出すの

が一番だ。」と岸本が言う。
「とがめやしないかナ。」と市川は顔をしかめながら。
「だいじょうぶ、まあぼくにやらしてみたまえ。」
と岸本はナイフを取り出す。市川は両足を友だちの前へ投げ出して、
「どうしても違うなあ、そこは経験があるからね。」
と言って笑った。
なんとなく部屋の内は湿気臭かった。屋根の上のほうでは、しきりに鶯や郭公の鳴く声が聞えた。四人はあぐらをかく、寝る、思い思いにやって、空想を誘うような鳥の歌に耳をなぶらせていた。急に市川は横手を打った。彼は何かめずらしい事実でも発見したかのように叫んだ。
「確かに細君以上だ。」
こう言い出した。
「よく君は人をびっくりさせる。」と言わぬばかりに菅は振り向いてみる。
「菅君、菅君。」と市川は岸本のほうへ指さしながら、
「この着物は西京が縫ってくれたんだとサ。」
「へえ。」と菅はおもしろはんぶんに。
岸本は苦い顔をした。「市川君、そう君のように言うから困る。実際ぼくは西京の世話になったよ。着物の事から、何から——いっさい。」と彼は妙にきまじめな調子で、「ぼくも君、旅に出てほかにたよる人がなかったもんですから、それを西京も気の毒に思ってくれたんでしょう。」
連中の話に土地の名が出る時は、きっと何かいわれがあった。これは仲間内の符牒のようなものである。
「まあ、そう弁解しないでもいいさ。」と言って市川は岸本の顔をながめたが、やがて思いやりのある語気で、「真実なんですか、西京が君に懐剣を贈ったとかいうのは。」
「ええ。」岸本の顔は赤くなる。
「どういうつもりでああいう物を君に贈ったのか、それを西京に聞いてみたいって、しきりに岡見君がそう言っていましたっけ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl